

(資料6)

萬福寺本堂、鐘楼、山門 (まんぷくじほんどう、しょうろう、さんもん)

員数：3件

所在地：知立市上重原町本郷 27

所有者：宗教法人萬福寺

1 登録理由

萬福寺本堂

地元の大工による西三河を代表する明治期の真宗本堂の遺構であり、建築的な質も高く近代和風建築の秀作である。

(登録基準：造形の規範となっているもの)

鐘楼

江戸末期の鐘楼として貴重である。禅宗様を基調とした建築で、造作も手が込んでいるものである。

(登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの)

山門

全体に入念な装飾を施した意匠を見せる比較的規模の大きい四脚門で、貴重な遺構である。

(登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの)

2 概要

本堂

木造平屋建、瓦葺、建築面積 603 m²、建設年代 明治 32 年／平成 26 年改修

鐘楼

木造平屋建、瓦葺、面積 13 m²、建設年代 文久 2 年(1862)

山門

木造平屋建、瓦葺、間口 5.4m、建設年代 天保 15 年(1844)

萬福寺は林桂山と号し、真宗大谷派に属する。弘仁 6 年 (815)、最澄の創立と伝え、もとは天台宗であったという。改宗の祖、了誓^{りょうせい}は建久 9 年 (1198) 相模国の生まれで、建保 2 年 (1214) 17 歳にして出家、比叡山延暦寺六十三代座主真性大僧正の弟子となり、萬福寺住持となった。貞永元年 (1232)、親鸞聖人が東国より上洛の途次、三河に逗留の折、了誓は矢作の柳堂での聖人の法に列席して深く帰依し、天台宗を改め、浄土真宗になったという。

本堂は、境内の西側中央に位置し、東を正面にして建つ。明治 28 年 (1895) と大正 3 年 (1914) の年記のある棟札が 2 枚残されており、『寺誌』によると、明治 28 年は起工式、大正 3 年は上棟式とあるが、本堂の完成時期は入仏式が行われた明治 32 年(1899)と考えられる。棟梁は明治期の西三河で活躍した小野田又蔵で、本堂は又蔵最盛期の代表

作と言える。

規模は桁行9間、梁間8間、木造平屋建の入母屋造¹、本瓦葺²、平入の堂であり、標準的な真宗本堂平面を持つ大型の堂で、三間向拝³が付く。内部については、外陣⁴・矢来内⁵・余間⁶・内陣⁷など発展完備された仏寺式の間取りを示している。外陣・矢来内を小組格天井⁸に、余間を折上小組格天井に、内陣を二重折上小組格天井とする。

鐘楼は、本堂の正面（東側）前方に位置し、山門の南西に隣接して建つ。寺蔵文書に寛文8年（1668）と文久2年（1862）の再建の記述があり、現在の鐘楼は文久2年の再建遺構と考えられる。規模は桁行1間、梁間1間、入母屋造、棧瓦葺⁹で、石積み基壇¹⁰上に棟を南北に通して建つ。軒は二軒扇垂木¹¹、詰組¹²の禅宗様を基調とした装飾密度の高い建築である。

山門は、堂の正面（東側）前方に位置し、東を正面にして建つ。規模は桁行1間、梁間2間、入母屋造、本瓦葺の四脚門で、棟通りに円柱を4本立て柱間を3間とし、戸口を構える構成は特異であり、全体に入念な装飾を施した意匠で、建築的な質も高い江戸時代末期の遺構として貴重である。棟札と寺蔵文書によって天保15年（1844）の再建であると知られる。

-
- 1 入母屋造：屋根の形式の一つで、上部を切妻とし、下部の四周に^{ひさし}庇や屋根を回した形態。
 - 2 本瓦葺：屋根葺きの一つで、平瓦を並べ、平瓦の端部間の上に断面半円の丸瓦を重ねた葺き方。
 - 3 向拝：参拝人の礼拝のために仏堂や社殿の正面中央に張り出して設けた^{ひさし}庇。向拝の大きさは、柱間の間数で示す。
 - 4 外陣：神社本殿や仏寺本堂の、内陣の外側で参拝の場所。
 - 5 矢来内：参拝の場である外陣と内陣を分ける段差や柵。
 - 6 余間：本尊（仏壇）の両脇にある間。
 - 7 内陣：神社本殿や仏寺本堂の、神体または本尊を安置した場所。仏寺本堂の場合、堂内を奥の内陣と手前の外陣とに分けている。
 - 8 小組格天井：格天井の^{ごうま}格間の中にさらに細かく組んだ格子を入れた天井。組み天井。
 - 9 棧瓦葺：屋根の重量軽減策として、平瓦と丸瓦を一体化させた波型の棧瓦を使用した葺き方。
 - 10 基壇：建物の基礎になる、土や石で築いた壇。
 - 11 垂木：木造建築における小屋組の一部。棟から軒にかけての斜材。
 - 12 詰組：組み物を柱の上だけでなく柱間にも置いて、密に配する形式。



本堂正面 外観（知立市教委提供）



本堂 内陣（知立市教委提供）



鐘楼 南西面外観（知立市教委提供）



山門 正面（知立市教委提供）